

三春駒の伝説

51年光村図書出版 5年国語

むかし、京の都に、坂上田村麻呂という強い武人がいた。

見上げるような大男で、その目はらんらんとかがやき、はり金を植えたようなひげは、むな元までのびていた。

そのころ、東北の地方に、^{おおた きまる}大多鬼丸という力の強い人がいた。

常に大ぜいの手下を連れて村々をあらし回り、おにのようにおそれられていた。

田村麻呂は、軍勢を率い、この大多鬼丸をせいばつに行くことになった。

いよいよその出発が間近にせまったころ、ある徳の高い住職^{注1}が、お別れにやってきた。そして、田村麻呂に1つの小さなはこをわたしてこう言った。

「このはこの中には、仏様の像をおきざみした残り木^{注2}に、わたしが精をこめてほったものがしまっておりま。お役に立つこともございましょうから、どうぞお持ちになってください。」

「それはありがたい。ちょうだいします。」

田村麻呂は、お礼を言ってこのふたを取ってみた。

中には、小さな木ぼりの馬が百頭、ちゃんとくらまで付けてならんでいた。

田村麻呂は、そのはこを持って都を出発した。

○

田村麻呂は、今の福島県の三春町の近くまで来て兵を止めた。大多鬼丸は、その近くの山^{注3}に立てこもっていたのである。

田村麻呂は、まず、大多鬼丸にこう参するようによびかけた。

しかし、大多鬼丸はこう参するどころかせせらわらって、

「都のやつに何ができる。田村麻呂など、ひとひねりにひねりつぶしてくれるは。」

とって、山からおりると、いっせいに^や矢をいかけてきた。

そこで、田村麻呂は、まっ先に馬を進めて、